

はじめに——今、なぜ、石川淳か？

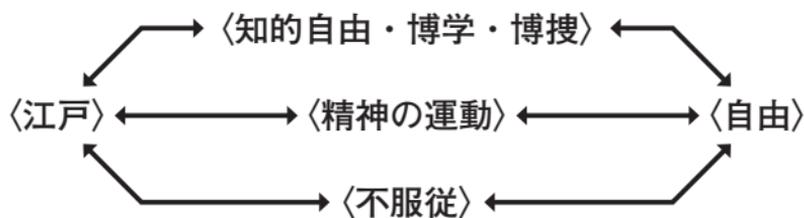
山口俊雄

小説があまり読まれなくなって久しい。ずいぶん前から、「小説は終わった」「文学は終わった」という声もひんぱんに聞く。そんななか、とりわけ難解さをもって知られる石川淳（一九九〇〜一九八七年）を、今なぜあらためて取り上げるのか。

それは、一言で言えば、時代が石川淳の再発見を、石川淳の作品の再読を求めているからである。

グローバリズムと新自由主義（ネオリベラリズム）が世界を覆ってしまっている今日の、このどうしようもない閉塞感の蔓延まんえん、格差・分断の拡大……。新自由主義と言うが、いったい誰にとつての自由か。それはあくまでも資本にとつての自由であり、決して人にとつての自由ではない。今、本物の自由が得がたいものになってしまっているのはまちがいあるまい。本物の自由はいったいどこへ行ったのか、どこにあるのか、どこに求めればよいのか。

このような問いが浮上しているなか、自由のセンスに貫かれた石川淳文学に触れることの意義がこれまでになく高まっていると言つてよい。石川淳を読んだことのある人にも読んだこと



のない人にも、この閉塞感に満ちた現在を相対化し、できれば脱出の手立てを考えるために、今、あらためて石川淳を読むことを提案するのがこの書籍である。

とはいえ、難解と言われがちな石川淳文学である。たとえば、だざい太宰治やあんご坂口安吾、織田作之助らとならぶ無頼派（しんげさく新戯作派）のひとり、という文学史的な知識を持っている人は多くても、実際に石川淳の作品を読んだことのある人は、太宰や安吾に比べてぐっと少ない。知られている割には読まれていないというのが、まが紛うかたなき石川淳をめぐる現実である。

そこで、石川淳の五十年以上にわたる作家活動、広範な作品群を貫く特徴について、あえて蛮勇をふるって早わかりの見取り図に整理してみよう。すると上のようになるだろうか。

説明していこう。

石川淳作品を説明するためのもっとも重要なキーワードは〈自由〉であ

る。

それはまずなによりも精神的な自由、〈知的自由〉であり、西洋文学（とくにフランス文学）、漢籍、日本の古典、そして文学以外の文献も含め、知的関心の赴くまま、古今東西の書物の世界を自在に涉猟するという営みのことである。

このような知的精神的なスケールの大きさが反映されたその作品群は、文学史の見取り図のなかに容易に収まらず、石川の訃報を伝える新聞記事の見出しに、「高踏・孤高文学界の最長老 石川淳氏死去88歳」（『東京新聞』朝刊、一九八七年十二月三十日）、「石川淳氏死去 前衛的作風 孤高の文人」（『読売新聞』同）と、「孤高」の文字が躍ることにもなった。

しかも、石川淳は知の自由な旅人というだけではなかった。〈博学・博搜〉は時に知の蓄積の重みのせいで人を不自由にすることもあるだろう。ところが、石川淳は〈精神の運動〉を重んじ、停滞することをなによりも嫌った。該博な知をふまえながらも、鈍重さとは無縁である。このことは、石川淳の作品の言葉、その言葉の連なるダイナミズム、軽快さに明らかである。

そして、〈自由〉を重んじ、なにもものもとらわれないことを優先するとなれば、目の前にある不自由・窮屈さに黙っていることはできないだろう。石川淳の作品には、不自由への〈不服従〉、とらわれからの自由を求めずにはいられない者の精神のありようが顕現している。

戦時下の言論統制で自由な執筆がままならないなか、石川淳は〈江戸〉に留学した。これはまず第一に同時代への〈不服従〉の実践であったが、その留学先で〈知的自由〉を体験し、江戸人の〈精神の運動〉に触れることになる。

もちろん〈江戸〉に行きあたって石川淳がただそこに停頓してしまうことはなく、〈江戸〉で獲得したものをみずからの小説作法に持ち帰り、作品世界を広げることになる。

ざっと以上のように早わかり的に整理し得る石川淳の文業・作品世界について、もっと具体的に掘り下げながら紹介するために、本書では、石川淳や江戸文学に詳しい執筆者五名が集まり、さまざまな角度から石川淳の世界に誘う<sup>いざな</sup>五つの章を用意した。

この息苦しい現代を相対化するために、根本に〈自由〉を据えた石川淳の魅力的な文学世界にぜひとも読者の皆さんをご案内できればと思う。

各章の冒頭に、その章の内容を編者・山口が簡単にまとめた文章を用意したので、興味を惹かれた章から読み始めてもらってもよいかも知れない。

また、付録の「読書リスト 石川淳作品一二選」もブックガイドとして活用して頂きたい。

# 目次

はじめに——今、なぜ、石川淳か？

山口俊雄

3

## 第一章 絶対自由を生きる

田中優子

13

「天馬賦」に見る絶対自由

精神の運動と絶対自由

精神の運動と江戸文化

「普賢」に見る江戸の方法

山東京傳評価から見る石川淳

次第に形をあらわして

## 第二章 石川淳の〈江戸〉をどう見るか

小林ふみ子

61

石川淳の〈江戸〉のはじまり

大田南畝への熱中

「天明調」「天明風」狂歌か、「天明狂歌」か

市井の学者たちの江戸研究誌、そのなかの南畝

石川淳と三村竹清・森銑三

古典籍から発想する方法

古典籍からの発想、その後

天明狂歌師無名人格論の影響力

あえての誇張、あるいは作為か

「俳諧化」「やつし」論の先駆性

南畝との距離と関係性

視座としての南畝

南畝の方法を試みる

### 第三章

#### 石川淳『狂風記』論

——〈江戸〉がつなぐもの

はじめに——現代の「八犬伝」

集英社と「狂風記」

帆苧基生

「狂風記」の重層的構図

大河ドラマ「花の生涯」からの着想

「狂風記」と一九八〇年代

パロディーの創造性と批評性

おわりに——古くて新しい〈人間観〉

## 第四章 石川淳流〈不服従の作法〉

——「マルスの歌」

山口俊雄

143

繰り返し言及される「マルスの歌」

流行歌、映画、噂話——メディアを通じた総動員

流行歌／映画／富士山／戦時下の噂話

登場人物たち

冬子／帯子／演技性・メディア性・シャーマン性／死／

美しきシャーマンたちとして／相生三治

「わたし」

正気と狂気／自然／思想

まとめ——同調圧力に抗して

## 第五章 たとえば「文学」、たとえば「佳人」

——総合的石川淳論の方へ

鈴木貞美

その存在

石川淳没後

たとえば「文学」

江戸に留学

学識の構え

年譜から

総合小説

精神の運動

たとえば「佳人」

「佳人」は叙述か？

セルフ・パロディーの流れに

「山桜」、もしくは見立てと象徴

そして「かよひ小町」

読書リスト 石川淳作品一二選

おわりに

山口俊雄

参考文献

執筆者略歴

240

254

257

263